

クレッド通信  
2019.7

# CREDD通信 11

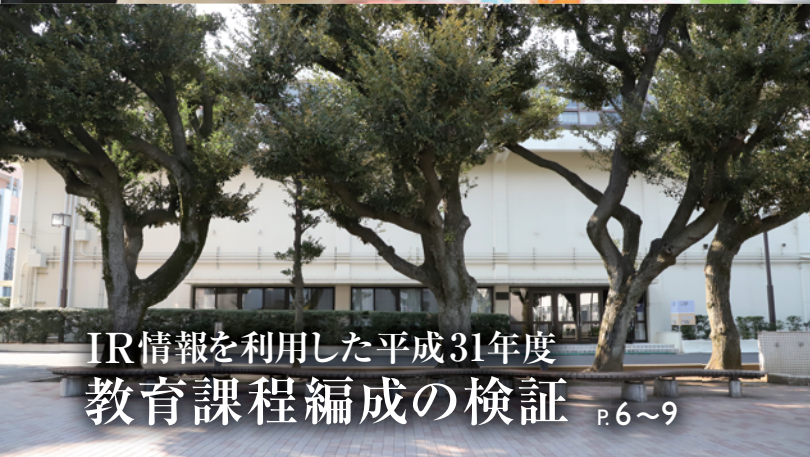
Center for Research and Educational Development



第3回  
新生ウェルカムパーティー P.3



IR報告  
新カリキュラムで  
これを変えたい！  
IR注目のデータ  
P.10  
〜  
P.11



IR情報を利用した平成31年度  
教育課程編成の検証 P.6〜9



平成30年度 リサーチ ウィークス  
図書館主催報告会  
P.4〜5



お知らせ  
学習成果の適切な把握、  
評価、および測定結果の  
活用に向けて  
P.12



## 学生FDサミット 2019春

島根県立大学出雲キャンパス

2019 春  
学生FDサミット in 島根県立大学 P.2



2019 春

## 学生FDサミット in 島根県立大学

2019年3月21日(木)～3月23日(土)  
参加者 学生2名

私は、今年の3月に島根県立大学で行われた「学生FDサミット 2019 春」に参加してきました。そこで感じたことを少しだけ書かせていただきたいと思います。

私は学生 CRED に入ったのは去年の12月、学生と教職員の交流会に参加したのがきっかけでした。学生 CRED が行なっている活動に興味を持ち、メンバーを集めていることを聞いた私はすぐに入ること決めました。しかし、入ったものはいいものの何をすればいいのか、そもそも何を目的としているのか、いまいよくわかっていませんでした。

そんな時に学生 FD サミットの話聞き、「もっと自分が学ばなければ」と思い、すぐに参加を決めました。

二日間で行われた学生 FD サミットですが、集まった大学の数や人数を知り、「FD 活動を行なっている大学がこんなに全国にあるんだ」と少し驚きました。と同時に、安心感も感じました。

1日目のある教授の話に「FD 活動はなくなるべきだ」という話がありました。最初はどういうことなのかわかりませんでした。話を聞いていくうちに「なるほど、納得!」という気持ちに変わっていきました。

その話の内容を簡単に説明すると、「一部の人が頑張って FD 活動しようという

意識を持って活動するのではなく、全員がFD 活動をしているという意識を持たずに活動する」ということです。この話を聞いた時に、私たちが目指すべき最終目的はこなんだと思いました。

斬新な考え方でであり時間がかかることですが、大学全体の意識が変わり全員が当たり前のように

FD 活動を行えば必ず実現できることだと思います。そのきっかけになる学生 CRED は重要な団体であると再認識できました。

FD サミット2日目は他大学の方とグループになり、FD 活動についてディスカッションをしてその内容を模造紙にまとめるということを行いました。私たちのグループが話し合ったことを少し紹介します。

まず、FD 活動をするためには自分たちの大学のことをよく知らなければ、学校生活をより良くすることはできません。そのためにはどうすれば良いか。アンケートなどももちろん大事ですが、もっと身近な声に耳を傾けることが大切であるという意見が出ました。例えば友達とのふとした会話の中であったり、食堂などで誰かがこぼし



た言葉だったり。そういった声を形にするための第一歩を私たちが行うのだというところに話がまとまりました。

皆さんが学校生活に対して思っていることがあれば、どんな小さなことでも声を出してほしいです。私たち学生 CRED はその声を形にするために精一杯頑張ります。



大江 和奏(おおえ わかな)  
児童学科育児支援専攻3年



第3回

# 新入生ウェルカムパーティー

2019年4月11日(木) 15:30～17:30 / Cafe Luce (16号館食堂ルーチェ)  
参加者 学生101名(上級生:36名、新入生:65名)、教員3名、職員3名

プログラム

- 15:30 開会の言葉  
趣旨説明
- 15:40 アイスブレイク
- 15:55 学科別交流
- 17:15 閉会の言葉
- 17:20 アンケート・肖像権同意書記入

学生CREDは“新入生と上級生が交流するイベント”を2年前から継続して実施しています。

私も昨年参加した際に、同じ学科の上級生から各授業の特徴やレポートを書くコツなどを教えていただきました。同じ学科に所属していても、日常生活の中で上級生とお話する機会は多くありません。大学2年になった今、上級生から直接アドバイスをもらえるのはとてもありがたいことだったのだと改めて感じています。

そこで今年は運営側として、新入生が抱えている学生生活への不安を少しでも解消できれば、との思いでこの「第3回 新入生ウェルカムパーティー」を企画しました。

本イベントをより良いものにするために学生CREDメンバーで12月から話し合いを重ね、今回は開催時期と応募方法を少し変更することに決めました。まず、履修登録前に開催したほうが新入生にとってより有意義なイベントになると考え、開催時期

を例年の5月から4月中旬へと変更しました。そして、これまで学生CREDのメールアドレスを応募先として記載していたポスターには、新入生がその場で簡単に応募できるように、送信先等が自動挿入されるQRコードを掲載することにしました。

ありがたいことに、ポスターを見た新入生から続々と応募のメールが届き、最終的には全ての学科(専攻)とも定員に達して当初の予定より早く募集を締め切るほどでした。

当日は、学科(専攻)ごとに試験対策法や取得可能な資格の詳細などをまとめた資料を配布しました。資料に記載された内容に加え、勉強とサークル・アルバイトとの両立について、第二外国語、サークル、緑苑祭など様々なトピックで話すことができました。ルーチェの店長さんが提供していただいた唐揚げやフライドポテト、チュロスをはじめとする美味しい軽食を食べながら、新入生だけでなく上級生も楽しく過ご

せたのではないのでしょうか。

新入生に回答していただいたアンケートには「先輩からたくさんお話が聞けて良かった」「来年は上級生スタッフとしてぜひ参加したい」という声も寄せられており、とても嬉しく思います。

第3回 新入生ウェルカムパーティーは多くの方々に支えられ無事に開催することができました。ご協力くださったルーチェの森店長さん、有志の上級生スタッフの皆さん、そしてCRED教職員の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



関根 彩乃(せきね あやの)  
環境教育学科2年

# 平成30年度リサーチウィークス 図書館主催報告会

板橋図書館 Lプラザにおいて、3つの催しが行われました。

## 歴代図書館長談話会 平成31年2月20日

大学改革が進む中、大学図書館の役割も変化します。図書館では、平成25年3月に当時の図書館長山本和人教授（現学長）が図書館員の意見を聞きながらまとめた「東京家政大学図書館将来構想-あるべき姿への指針-」をもとに、PDCAサイクルを回し、今後への進むべき方向を見出すことを試みてきました。今回は、歴代図書館長にご登壇いただき、立場をこえて図書館スタッフ全員参加による談話会を開催しました。

### ●歴代図書館長

- 平成19～24年度 山本和人教授
- 平成25～28年度 新井哲男教授
- 平成29年度 能澤慧子名誉教授

### ●現図書館長・副館長

- 平成30年度～ 太田洋図書館長
- 平成26年度～ 今留忍副館長

事前に全員が「東京家政大学図書館将来構想-あるべき姿への指針-」を熟読して参加しました。本指針は、板橋ワンキャンパス化が実行され、その後、平成26年度から狭山キャンパスに新学部を設置する計画が出ていた平成24年度に、5年先を視野に将来像を描いたものです。本指針には、大学図書館の中心機能として大学の教育研究に関わる学術情報の体系的収集、蓄積、

提供が掲げられ、大学図書館を「知の宝庫」として位置づけています。そして「知の宝庫」の更なる発展のため、従来の図書館機能（1.教育研究等への支援機能、2.学習環境の提供・整備機能、3.学術情報の収集・提供・保存機能、4.学園情報・資料の集積・保存・管理の機能、5.地域社会等への貢献機能）に加え、施設・設備と快適空間の確保、蔵書コレクション形成の明確化、大学内外との連携・協力、授業支援・情報リテラシー教育支援、職員の研修があげられています。

歴代図書館長より在任中の東京家政大学図書館のあゆみについてお話を伺い、今後のあるべき姿として、次のポイントをいただきました。1.研究支援の充実 2.学生一人ひとりの居場所となる学修環境の整備・充実 3.コレクション整備とデジタル化 4.専門性の高い職員 5.大学としての高度な専門性、品位と特色ある図書館の構築 6.学内連携強化

また、狭山図書館においては医療系図書館構築について報告され、今後は地域との密着度の高い図書館を目指してほしいとの将来像プランをいただきました。

図書館でのラーニングコモンズ設置・拡



充は平成27年度から平成30度にかけて行われました。板橋図書館のLプラザは3つのLから形成され、その中心となる理念がlibertyです。何ものにも束縛されず、学生が自由に発想できる空間を図書館に設け豊かな人間形成に寄与したいという強い思いが感じられます。短い時間では言い尽くせない図書館の役割の重みを改めて感じました。

「東京家政大学図書館将来構想-あるべき姿への指針-」が今なお生きた「あるべき姿」を残していることが確認できました。さらに「知の宝庫」として発展を遂げるため、図書館スタッフ全員で「今後のあるべき姿」を模索し、形作っていきたいと思います。新しい大学の時代に対応すべく、大学図書館の役割をさらに深く広く進めていく所存です。



歴代図書館長と平成30年度板橋図書館・狭山図書館全員集合！



## 接遇研修 平成31年2月22日

講師は接遇コンサルタントの加納尚樹先生です。著書に『ホテルに学ぶ図書館接遇』（青弓社2018年）があります。加納先生はイギリスの大学でホテル経営学を学び、レクレドールメンバーのコンシェルジュとして活躍されていました。また、各業界で教育担当を歴任され、クリントン元大統領来日時の宿泊先でのご担当をされたご経歴があります。

教員、他部署事務職員、板橋及び狭山図書館スタッフ全員による参加がありました。内容は講義形式と実演、館内での実地指導と行われました。

類似する言葉であるサービス、おもてなし、マナー、接遇、これらの定義の説明から始まりました。挨拶の仕方、ペンや本の渡し方に至るまで加納先生は一つ無駄な

動きがなく、ゲストに無駄な時間を使わせません。洗練された動きにともかくマジックを見る思いでした。

板橋図書館内を1階、2階と隅々まで丁寧に周り、アドバイスをいただきました。カウンターのもの置き方やカウンター雰囲気づくり、椅子の並ぶ方向、掲示物の出し方、トイレを快適空間にするポイントを実地で指導いただきました。加納先生は建築にも造詣が深く、これまで見慣れている2階でたくさんの気づきをいただきました。2階中央のカウンター席の大きな窓はインスタ映えする。2階閲覧和室は室内屋根型天井であり、大変高級感ある造りである。ホテルでいえば1泊5万円クラスであるとのことでした。

当日は16時から始まり、熱意溢れる講



プロの室内空間づくり



義と実地指導により終了予定時間を大幅オーバーし、まだまだお話を聞きたいという余韻を残しての散会となりました。参加者からも第2回目の開催希望をいただいています。

研修を受けっぱなしにはせず、研修で得たことを直後のアンケートで振り返り、さらに3月には板橋図書館スタッフ全員で集まり、接遇について考える時間を作りました。その結果、重要なことは図書館のあるべき姿を見定め、それに沿った接遇やサービスを話し合っていくこと、今後も継続して共有していくことを確認合っています。

歴代図書館長談話会と接遇研修との関係、意義が図書館スタッフ間で共有でき、今後の活動の礎となる大切な研修となりました。



## Library Mates 平成30年度活動報告会 & 図書館キャラクターグランプリ出展社賞授賞式 平成31年2月25日

図書館学生ボランティア団体 Library Mates がリサーチウィークス活動報告会にて平成30年度の活動を発表しました。平成30年度 Library Mates は29名のメンバーから構成されています。Library Mates の活動は大きく分けて班別活動と全体活動とがあります。班別では読み聞かせ、グッズ、ポップ、飾り付けがあります。全体では選書ツアー、図書館総合展でのポスターセッション参加、ラーニングcommonsでの *Kasei no Wa* 特別企画「谷川俊太郎さんと詩で話そう」にて運営補助にあたるなどの活動がありました。発表用パワーポイントも学生自ら作成しました。

続けて、初代 Library Mates 考案の図書館キャラクター「バニー・ホンガスキー」

が図書館総合展における図書館キャラクターグランプリ出展社賞を受賞し、その授賞式がブレインテック社ご来館により実施されました。ブレインテック社のキャラクター「ウパっち」とバニー・ホンガスキーのコラボによるひざ掛けを副賞としていただきました。

Library Mates が集まった本活動報告会に狭山のリハビリテーション学科の学生1名も参加し、Library Mates との交流を楽しんでいただきました。Library Mates の活動が両キャンパスの学生交流を広げる大いなる可能性に期待を寄せて、報告会を終了しました。

図書館 鈴木恵津子



図書館キャラクター  
バニー・ホンガスキーです



平成30年度 Library Mates !

副賞の  
コラボひざ掛け



# IR情報を利用した平成31年度教育課程編成の検証

別項でも述べましたが、大学は、ポリシーの策定単位ごとに、確かなエビデンスにもとづいて自らの取り組みを点検・評価し、恒常的に教育・学習の質の保証・向上を図ることを求められています。また、本学では、平成28年度に、「東京家政大学・東京家政大学短期大学部における内部質保証の方針・手続」を定め、点検・評価を毎年度行い公表することを宣言しています。そこで、平成30年度に入り、平成29年度の取り組みについて、IR情報を利用して点検・評価し、令和元年度（今年度）の教育活動の目標を設定することを、学科・科にお願いいたしました。取り組み初年度は、点検・評価項目を「授業外学修時間の確保」「授業への学生の主体的関与の推進」「学生の成長」「単位取得状況の適切性」に絞り、平成29年度に実施した授業アンケート、達成度アンケート、学生調査などから関連項目を抜き出して学科・科ごとに「IR情報」を編集し、この「IR情報」にもとづいて、平成29年度の点検・評価、および令和元年度の目標設定を行っていただきました。

## 家政学部 児童学科

平成29年度の児童学科に関するIR情報は示唆に富んでいた。検討の結果、児童学科の学生の第一の改善点は「授業外学修」の充実であった。授業外学修が十分に行われていない原因は、アルバイト時間が他大学や本学他学科に比べて長時間であることが考えられた。そこで、科内会議で議論した結果、家庭事情等を配慮しながら、身体的・精神的負荷の少ないアルバイトを適度に行うよう指導することに決まった。過度のアルバイトは授業の遅刻や居眠り等につながるため、授業そのものにも悪影響がある。また、教員は具体的かつ明確に授業中に授業外学修を指示することも取り決め、文書化した。非常勤講師の先生方にも、平成31年4月1日に協力依頼の通知を出し、授業外学修の充実に歩調を合わせていただくをお願いをした。また、入学式後のクラス懇談会では、新入学生と保証人に向けた文書を配付し、アルバイトを必要最低限にすること、CAP44に伴う空き時間の増加は授業外学修に充てることを指導した。新カリキュラムの1年生が4年生になるまでには、指示がなくとも十分な自己学修を行う指導を目指したい。

## 家政学部 児童教育学科

教育職員免許法の改正（平成28年11月）及び同法施行規則の改正（平成29年11月）により、教職課程で履修すべき事項の全面的な見直しにより、児童教育学科では、平成31年度より新しい教員養成の教職課程となります。

小学校での外国語（英語）教育、ICTを用いた指導法、特別支援教育の充実、学校安全への対応、道德教育の充実、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善、学校と地域との連携、チーム学校運営への対応、学校体験活動等についての資質・能力を有する教員の輩出が喫緊の課題となります。

児童教育学科においては、平成29年度の年度末達成度アンケートと授業アンケートを基に、授業に関する事前学習及び復習の時間の設定と授業中の学生の主体的な関与の拡充を図っていくことが重要と考えました。そして、平成31年度からは、具体的に、予習・復習等の必要性のある授業への改善、manabaを利用した小テスト等の課題提示や反転授業の積極的活用、授業中の学生同士の話し合い、学生の意見や考えを述べる場の設定などを、全教員で共通認識し、授業改善に努めていきます。



## 家政学部 栄養学科

### 1. 授業外学修時間

(1) 平成27年度と比べ平成29年度の授業外学修時間は、1年生は減少したが2年生では大幅に増加し、3年生・4年生でも増加または横ばいであった。その要因として、1年生の大学外アルバイト時間が多いためであることが推測される。(2) 講義科目の授業外学修時間が、実験実習科目と比べ少なかった。実験実習科目ではレポート等の課題を課する割合が高い。実験実習科目と比べ講義科目への興味が低い。(3) 上記のことから、講義科目に対する学生の関与を高めるなどの対策をとることが必要であり、そうすることにより授業外学修を充実させられる可能性があると考えられる。

### 2. 学修達成度

(1) 学修成果の達成度合いは、1年生では低いが4年生になると非常に高くなっている。(2) 単位取得は1年生から4年生にかけて平均的に取得されておりバランス良く勉強を進めている。

### 3. 31年度の目標・行動計画

(1) 講義科目の授業外学修時間を充実させること。(2) 授業に対する学生の関与を高めること。(3) 平成31年度にカリキュラム改訂をしたことにより、学修達成度が向上していることを確認する。

## 家政学部 環境教育学科

IR情報のデータを基に行った学生の学修状況についての検証結果から以下のことが分かった。(i) 他大学と比較した場合、1週間当たりの授業数が多いにも関わらず予習復習に費やす時間は変わらず、1科目当たりの授業外学習時間が短い、(ii) 1週間の中で趣味に費やしている時間が6時間以上の学生は7割程度おり、特に20時間以上の学生の割合はその中の約4割を占め、他大学よりも約2倍多い、(iii) ほぼ全ての講義科目に対して予習復習、小テスト、課題に関する授業アンケートの評価点が3点未満、などである。また、本年度からキャップ制導入により1週間当たりの授業数に余裕ができるようになるため、その時間を学習時間に充てるための指導がより必要となる。そこで、本年度の方針として、講義科目について、予習復習のための小テストや課題提示を増やすことで授業外学習に関する評価点を向上させ、かつ、アクティブラーニングの活用などにより学生が主体的に授業に関与することを促すための取り組みを積極的に取り入れ、学生の学習意欲の向上を図る。

## 家政学部 服飾美術学科

今年度から新カリキュラムになったことで、学生への各種アンケート結果からカリキュラムの変更が学生の学修にどのような変化をもたらしたのかを検証し、次期カリキュラム編成に役立つようにIR情報を根拠とし、問題点を明確にすることが大きな目標である。

学生の学修達成度を高めることに関しては、「他の人と協力して物事を遂行する能力」「一般的な教養」「プレゼンテーションの能力」「文章表現の能力」「地域社会が直面する問題を理解する能力」「外国語の運用能力」「数理的能力」「コンピュータの操作能力」について、各教員が取り入れやすい項目を選び授業を行っていくことを確認し、教員間でのコミュニケーションを円滑にすることで情報を共有する。

服飾美術学科の専門科目の約45%が実習・実験科目であるので、製作の続きや実験レポートの作成など、授業外学修とくに授業後の学習時間は多い傾向にあるが、講義科目については授業外学修の時間が少ないことから、双方型・参加型の授業スタイルを取り入れるべく、公開授業の積極的な参加を推進し、授業内容を協議していく。

## 家政学部 造形表現学科

教育課程編成に関しての目標・行動計画は、講義科目に対してはmanabaを利用した課題提示やルーブリックの活用を通じ、予習・復習といった基本的な学びの姿勢を軸に、授業外学修時間を充実させる。また本学科において多くの割合を占める実技科目については、多様な授業形態があるため、科目単位での予習・復習のあり方の検討と確認を進めながら、時間割外に実技課題に取り組む学生の学修に対してのサポート状況の把握に努め改善する。さらに、実技科目の中での授業への学生の主体的関与のありかたを検討し、グループワーク等の内容の検証も進め、授業への主体的関与について目標値の改善を目指す。

学修達成度に関しての目標・行動計画は、平成31年度以降の入学学生(新カリキュラム)と、以前の学生(旧カリキュラム)の学修達成度の比較を通じ、適切な改定となっているかについてのチェックを行うことで、より充実した学修を目指す。また、アートキャンプ参加者と学修達成度のクロス集計を元にしたプロジェクト型学習の成果の検討を進め、学科全体の学修のあり方を評価し、改善していく。

# IR情報を利用した平成31年度教育課程編成の検証

## 人文学部 英語コミュニケーション学科

英語コミュニケーション学科におけるIR情報を利用した平成31年度教育課程編成に関する方針は、以下の通りである。まず、「授業外学修時間の確保」では、全体としては学修時間が増えている一方で、4年生では学修時間が短く、履修科目数が少ないという学科の傾向が現れているため、今回のキャップ制の導入により、学年ごとの履修単位数の偏りを減らすことを目標とする。また、授業での課題を課す割合が高いにもかかわらず、学修時間が少ないことから、今後、manaba等を利用し、課題の提出頻度のみならず内容に関しても工夫を行うことで、授業外学修時間をより充実させる。次に、「授業への学生の主体的関与の推進」では、より学生の関与を求める必要がある。特に、講義科目においては、担当教員への質問割合と学生の参加機会の割合が低いことから、反転授業等の取り組みを積極的に行い、授業への学生の主体的な関与を高めることとする。

## 人文学部 教育福祉学科

教育福祉学科の新カリでは、学科の学びの柱である社会教育、社会福祉、心理について、それぞれの基礎となり、また社会教育主事基礎資格や、社会福祉関係資格、公認心理師等心理系関係資格に必要な「社会教育概論」「社会福祉概論」「発達心理学」を必修とした。本学科の4年生は国家試験や公務員専門職の受験勉強で授業外学修時間が他学科より多いが、1、2年生は少ない。今回の新カリは早くから将来の目標を明確にし、学修に取り組めるようにした。

学修達成面では、多くの学生が授業に関わるボランティア活動等を熱心に行い、高い評価や満足度を得ているが、それを授業外学修と認識せず、過小評価している傾向がある。本学科の学びは、いずれも社会生活に直に関わる学であり、実践経験は学びを確かにしていくことに繋がる。授業外学修の意味を教員たちが正しく伝え、また新カリで充実させた演習・実習科目を行うことにより、さらにはmanabaによる反復学修やASFシステムの結果を効果的に活用し、学生が自分に対し強みを正しく評価でき、自信を持って学生生活や将来に向けての活動に取り組んでいけるよう導いていきたい。

## 人文学部 心理カウンセリング学科

IR情報の分析結果から、【学生の学修状況】の特徴として、①1日2時間以上の授業外学修を行う学生の割合が増加している、②実習・演習科目では「予習・復習」「小テスト・レポート」「学生の参加を求める授業」の得点が高い、③1、4年生では授業外学修時間が短い、④講義科目の「予習・復習」「小テスト・レポート」「学生の参加を求める授業」の得点が低い、があげられた。①②については、2017年度からの一部授業における反転授業の導入、科内会議でのIR情報の共有・授業改善への活用の効果を示唆され、2019年度はmanabaの積極的活用と併せてさらに推進していく。③④については、1年次の履修科目の多さと4年次の開講科目の少なさが一因と考えられ、2019年度からのカリキュラム改訂とCAP制導入による改善が見込まれる。

【学生の成長】では、本学科DPに関連する対人コミュニケーション、データ分析・問題解決、専門知識習得などは学年ごとに高くなっている一方で、グローバルや異文化理解に関する力が低い点が課題である。2019年度は、大学のIR情報に加えて本学科独自のwebフィードバックシステムのデータ分析を行い、4年間の学修達成状況について検討する。

## 健康科学部 看護学科

授業アンケートから、主体的関与をみる「学生に自分の考えや意見を述べるように求めることがある」は、講義科目では平均3（「ときどきした」に相当）に達しないが、演習科目では平均3を超えている。同様に「グループワークなど学生の参加を求めることがあったか」は、演習科目では平均3.5を超えている。演習は実際の看護場面を想定して実施されるため、おのずと学生の主体的な関与が促されている。講義科目でも積極的にグループワークを取り入れ、学生の主体的な関与を促していきたい。

今年の本学科の看護師国家試験の合格率は100%で好成績を収めることができた。年度末達成度アンケートによると、4年生の授業外学修は、「3時間以上」が50%と高く、国家試験の対策講座や定期的な模擬試験があったためと考えられる。模擬試験の受験後はポートフォリオを活用して弱点や課題に沿った計画的な学習を指導している。一方、1年生の授業外学修は、「1～2時間」が59～66%と他の学年よりも短い。1年次には、看護を学ぶ上での基礎科目が多数あり、予習・復習が重要である。manabaを活用し、授業外学修を促していきたい。



## 子ども学部 子ども支援学科

授業外学修および復習に関しては学年が上がるにつれて確保される時間は増えており、学修達成度も4年生になると「子どもを社会における貴重な存在として相対的に理解できる」の項目で全員が「ほぼ達成できた・達成に近づいている」としており、保育者資格取得に向けて意欲の向上が見られ、また「授業内容は工夫されている」が3.3点と高得点である事は、教員の意欲も学生に伝わっていると考えられる。一方、予習については「あまりしなかった」が中央値で、授業中に意見を述べる機会などは多くなく、さらに「グローバルな視点に立ち活躍できる行動力」は低く、今後アクティブラーニングなど授業内容にさらなる工夫が求められていると考える。令和元年度からは在学生とともに新入生には新カリキュラムにより、DP・CPを周知し、学生自身が卒業までの到達目標を明確に意識して学修できるよう指導し、CAP 制の導入により適切な学修時間を確保できるよう配慮する。また manaba を活用し、学生の学修進捗の把握と達成度、履修カルテや資格関連に関わる自己点検を集約し、学科全体での教育の質向上を目指した PDCA システムを構築する。

## 短期大学部 保育科

平成29年度の保育科に関する IR 情報は示唆的であった。検討の結果、保育科の学生の第一の改善点は「授業外学修」の充実であることがわかった。なぜ授業外学修が十分に行われていないのかを分析すると、アルバイト時間が他大学や本学他学科に比べてやや長時間であることが原因として考えられた。科内会議で議論した結果、家庭事情等を配慮しながら、身体的・精神的負荷の少ないアルバイトを適度に行うよう指導することに決まった。過度のアルバイトは授業の遅刻や居眠り等につながるため、授業そのものにも悪影響がある。また、保育科の学生は履修単位数が多く、2年間で5回の保育・教育実習を行うことから、大変忙しい毎日を送っている。そこで、教員は「量（時間）よりも質」の授業外学修を学生に指導することを取り決め、文書化した。さらに、非常勤講師の先生方にも、平成31年4月1日付で協力依頼の文書を出し、「量より質」の授業外学修の充実をお願いをした。また、入学式後のクラス懇談会では、新入学生と保証人に向けた文書を配付して、授業外学修とアルバイト問題の説明を行った。



## 短期大学部 栄養科

IR 情報等の調査結果から栄養科のディプロマポリシーに掲げた学修成果の達成度に関しては、ほとんどの項目で「ほぼ達成できた」という回答の割合が増えており、なかでも「栄養士・栄養教諭・家庭科教諭において、食と健康に関する基礎知識を理解、習得し、ライフスタイルの変化に対応できる能力を有している」という学修成果に対して、「ほぼ達成できた」という回答が2年生の約90%に達している。一方、「数理的な能力」、「外国語の運用能力」などについては、「増えた」という回答は少数にとどまっていることが課題である。したがって、新たに発足したグローバル教育センターによる英語教育の充実が期待される。また、manaba を利用した小テスト等の課題提示や反転授業の積極的活用を通じて、とくに講義科目の授業外学修時間を充実させることや授業中に学生の意見や考えを述べてもらうなど、授業への学生の関与を高めることが求められる。さらに、専任教員全員でシラバスのピアレビューを実施し、記述内容の充実を図ることも必要である。

# IR報告

## 新カリキュラムでこれを変えたい！－IR注目のデータ－

### 新カリキュラムスタート

平成31年4月、東京家政大学板橋キャンパスでは、100分授業とCAP44とを特徴とする新カリキュラムがスタートしました。100分というまとまった授業を利用して、様々なアクティブ・ラーニングが実施されることになるでしょう。学生が学修内容を自分に引きつけて、主体的に学ぶようになって欲しいものです。また、授業期間が2週間減りますので、長期休み等に、インターンシップや留学、サークル活動等で、その主体的な学習態度が生きることを願うばかりです。

ところで、CAP44とは年間履修単位数を44単位以下に抑えるというカリキュラム方針です。これは、授業外学修（復習・予習等）を充実化させるためのものです。つまり、学生の授業外学修が活性化されない限りはこのカリキュラムは効果を発揮しません。

したがって、今後行われていく学生に関する調査では、これに関連するデータに着目して必要があります。



### 注目すべきデータ

現在、集計・分析済みの平成30年度分の学生調査の結果から、注目すべき点を挙げておきたいと思います。

「週あたり授業外学修時間」の折れ線グラフ（図1）を見ると、横ばいになっています。2019年度にはぜひ上昇を期待したいところです。特に、一年生の時から大学生らしい学習習慣をつけておけば、それ以降

の学年における授業外学修時間の伸びも確かなものになるでしょう。したがって、今後、一年生の伸びが期待されます。

続いて、「週あたり大学外アルバイト・仕事時間」の折れ線グラフ（図2）を見ると、横ばい・高どまりです。大学生への保護者からの仕送りが減るなかで、決して遊ぶためのお金を稼いでいるわけではないと思われま。しかし、特に身体や心に負担

図1. 週あたり授業外学修時間（平均：hr）

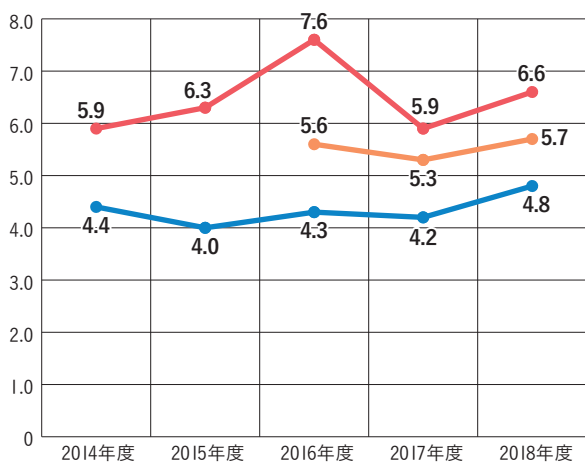


図2. 週あたり大学外アルバイト・仕事時間（平均：hr）

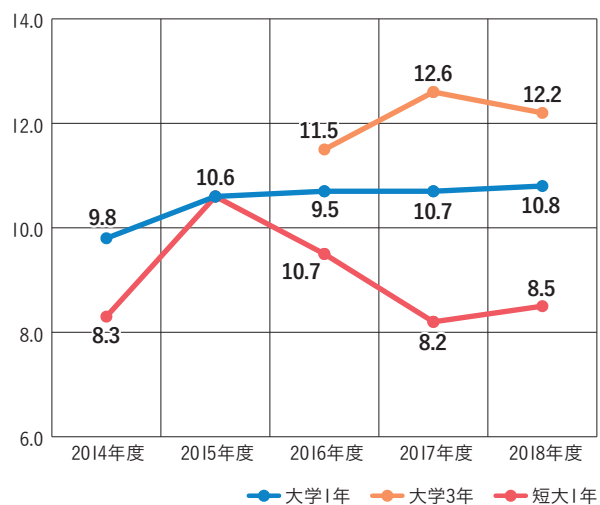
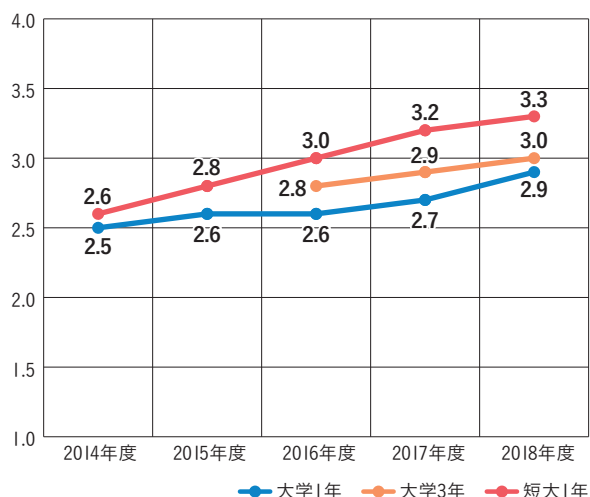


図3. 大学の授業での経験「授業中に学生同士が議論をする」



のかかるものは避け、なるべく適正な時間内でのアルバイトを教職員は助言したいものです。授業外学修の約2倍のアルバイト時間である実態を改善していかなければなりません。

そして、「大学の授業での経験：授業中に学生同士が議論をする」（図3）をみると、右肩上がりになっています。アクティブ・ラーニングの一つとして「議論」が用いられているためでしょう。100分授業の中で、より濃密な議論をして欲しいものです。もちろん、授業外学修がきちんと行われた上での話です。授業外学修が不足し

たまま、授業内で議論を増やすことは、授業の学びを低下させます。また、履修単位は44単位以内に抑えられていますので、学生の総合的な学びの幅や深さが低下します。

学生どうしが授業内で有意義な議論を行うことによって、学生どうしの友情が深まったり、学生生活の充実感が高まったりすることが望ましいです。そのためには、質の良い議論を導く教員の工夫が求められます。「入学後うまくいったこと：他の学生との友情を深める」「学生生活の充実感」の折れ線グラフ（図4）が右肩上がりにな

ることが、授業に良い「議論」を採り入れた証の一つになるでしょう。

**おわりに**

令和元年度に実施される教育改善は、令和2年度に、データに基づいてその成果が検証されます。良い結果が出ればそれに勝るものではありません。しかし、1年の取り組みですぐに向上が見られるとも限りません。根気強く、工夫を重ねながら、学生の資質・能力の向上に向けて我々教員は努力していかなければなりません。

解析) 宮東城 文責) 平山祐一郎

図4-1. 入学後うまくいったこと「他の学生との友情を深める」

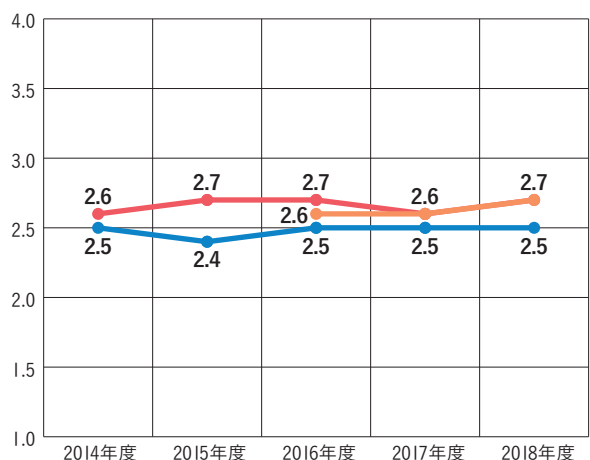
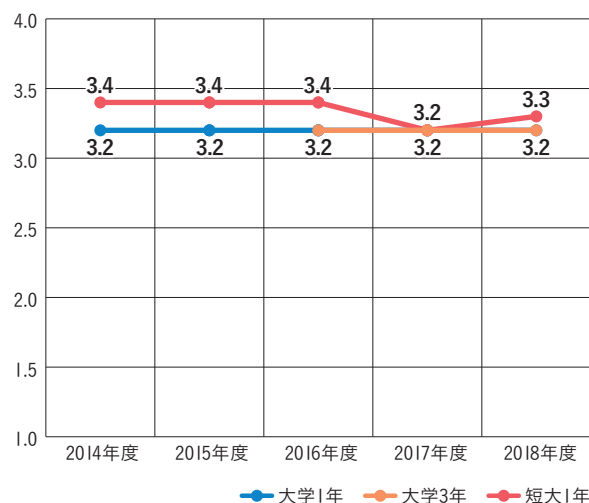


図4-2. 学生生活の充実感



## 学習成果の適切な把握、評価、および測定結果の活用に向けて

### 3ポリシーに基づく大学教育のPDCAサイクル

大学は、理念や社会の要請等を踏まえ、学生が身に付けるべき知識、技能、態度など、卒業時に授与する学位にふさわしい学習成果を明示することを求められています。これが学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）です。そして、学習成果を達成するための具体的な教育課程の編成・実施、学習成果の評価の在り方等を示すのが、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）です。これら2つの方針に加えて、大学、学部・学科等の教育理念、ディプロ

マ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針、受け入れる学生に求める学習成果を示すのが入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）です。

大学は3ポリシーを踏まえ、以下のPDCAサイクルを適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習等が適切な水準にあることを自らの責任で説明・証明していかなければなりません。

- **Plan** : 3つのポリシーの一体的な策定によって、選抜、教育、卒業の各段階における目標を具体化する。
- **Do** : 3ポリシー（Plan）に基づいて、入学者を選抜し、体系的で組織的な教育を実施し、学位を授与する。
- **Check** : 3ポリシーに照らして、大学の取組（Do）を点検・評価する。
- **Action** : 自己点検・評価（Check）に基づいて、大学教育の改善・改革を図る。

### 本学における学習成果の把握、評価の現状

ディプロマ・ポリシーで掲げた学習成果の獲得について、大学あるいは学科・科として掲げた目標の達成状況を点検・評価し改善を図っていくには、学習成果を適切に把握し評価する必要があります。

学習成果に関連する種々のデータを収集分析し、点検・評価のエビデンスとして使いやすい形にまとめて提供すること（教学IR）は、学修・教育開発センター（CRED）の任務の一つです。

データ	特徴・測定内容
GPA	秀=4、優=3、良=2、可=1、不可=0として、履修登録した科目の成績を1単位当たりの平均として示したものの。
学生調査	全国の約60大学が参加する大学IRコンソーシアムの共通調査を利用して、1年生と3年生全員を対象として毎年11月に実施。授業での経験、授業以外の学習経験、時間の使い方、能力や知識の変化などに関する質問に自己評価で回答を求める。
達成度アンケート	全学年全学生を対象として、毎年度末にmanaba上で実施している（回答率は約45%）。一日当たりの授業外学習時間、学科・科のディプロマ・ポリシーに掲げた学習成果の達成度の自己評価などを問う。
進路に関するアンケート	全学年全学生を対象として、毎年4月にキャリア支援課・学務課が実施。就職に関する意識のほか、学年が始まる時点における能力や知識（分析力や問題解決能力、人間関係を構築する能力、プレゼンテーションの能力、主体性等）の自己評価を問う。2～4年生には、教育内容に対する満足度や学生生活の充実度についての回答も求める。
卒業生に関するアンケート	卒業を間近に控えた全4年生を対象として、キャリア支援課・学務課が実施するアンケート。就職活動に関する質問のほか、卒業時における能力や知識（分析力や問題解決能力、人間関係を構築する能力、プレゼンテーションの能力、主体性等）の自己評価を求める。
卒業生追跡調査	キャリア支援課・学務課が卒業生に対して実施し、現在の勤務状況等に関する質問のほかに、勤務先で重視される能力などを問う。
採用先ニーズ調査	キャリア支援課・学務課による実施。本学の卒業生について高く評価できる力（社会人基礎力）等を、卒業生を受け入れていく企業に問い、回答を求めている。
GPS-Academic	上に挙げたデータの多くはアンケートへの自己評価による回答である。今年度から、アンケートだけでなく、問題解決に必要な思考力をテスト形式で測るGPS-Academicというツールを導入した。1年生と3年生全員に受検を求めている。

### 令和元年度の課題

これらのほかにも、科目ごとの成績分布や資格取得状況、卒業論文の提出率など、学習成果の指標として活用しうるデータは種々考えられます。また、人文学部が今年度から蓄積型自己評価システムによるデータ収集を開始するなど、学部や学科・科あるいは諸部署が独自に有するデータも少なからずあるはず。学修・教育開発センターは、学部や学科・科などと協力し、それぞれが独自に行っている学習成果把握の取り組みと連携していく予定です。

このように、学内で利用可能なデータは数多く存在しますし、学習成果を多様な観点から把握することの意味は小さくありません。しかし、当然のことながら、データが多ければよいというものではありません。データは適切に分析され評価され活用されてこそ意味

を持ちます。大事なことは、分析の目的を明確にすること、分析の結果を利用しやすい形で提示することです。大学、あるいは学部、学科・科が自らの取り組みの現状を点検・評価し、カリキュラムの見直しや中長期的な改革に結びつけられるようにするには、どのようにエビデンスを提供す

ればよいか。学修・教育開発センターは、令和元年度を通じて検討を進めます。

井上 俊哉（いのうえ しゅんや）

本学人文学部心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）、学修・教育開発センター所長。平成3年本学着任 / 研究分野：教育心理学、心理統計学 / 著書：『メタ分析入門』（東京大学出版会）、『心理検査法入門』（福村出版）、『心理統計の技法』（福村出版）

